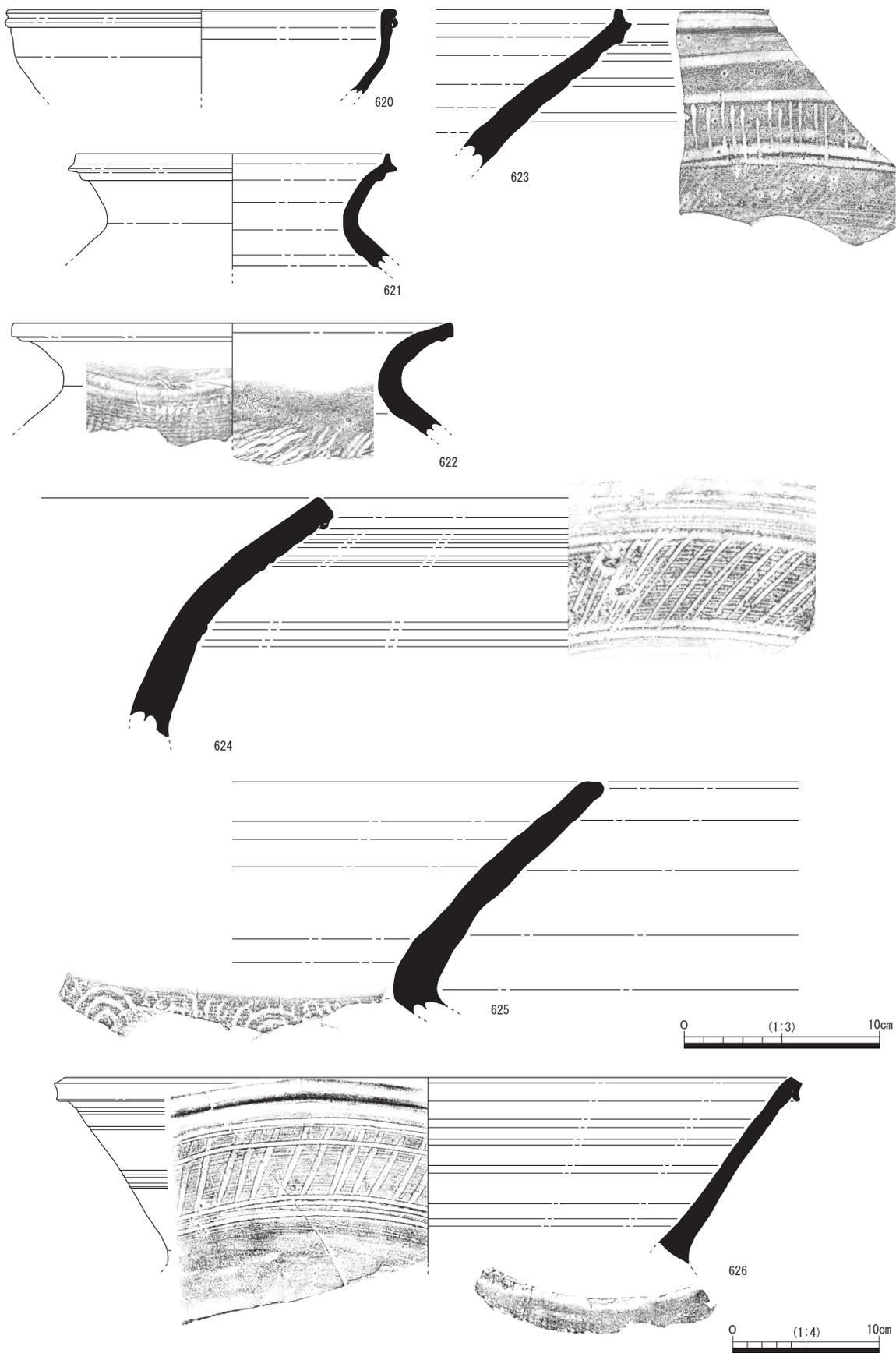


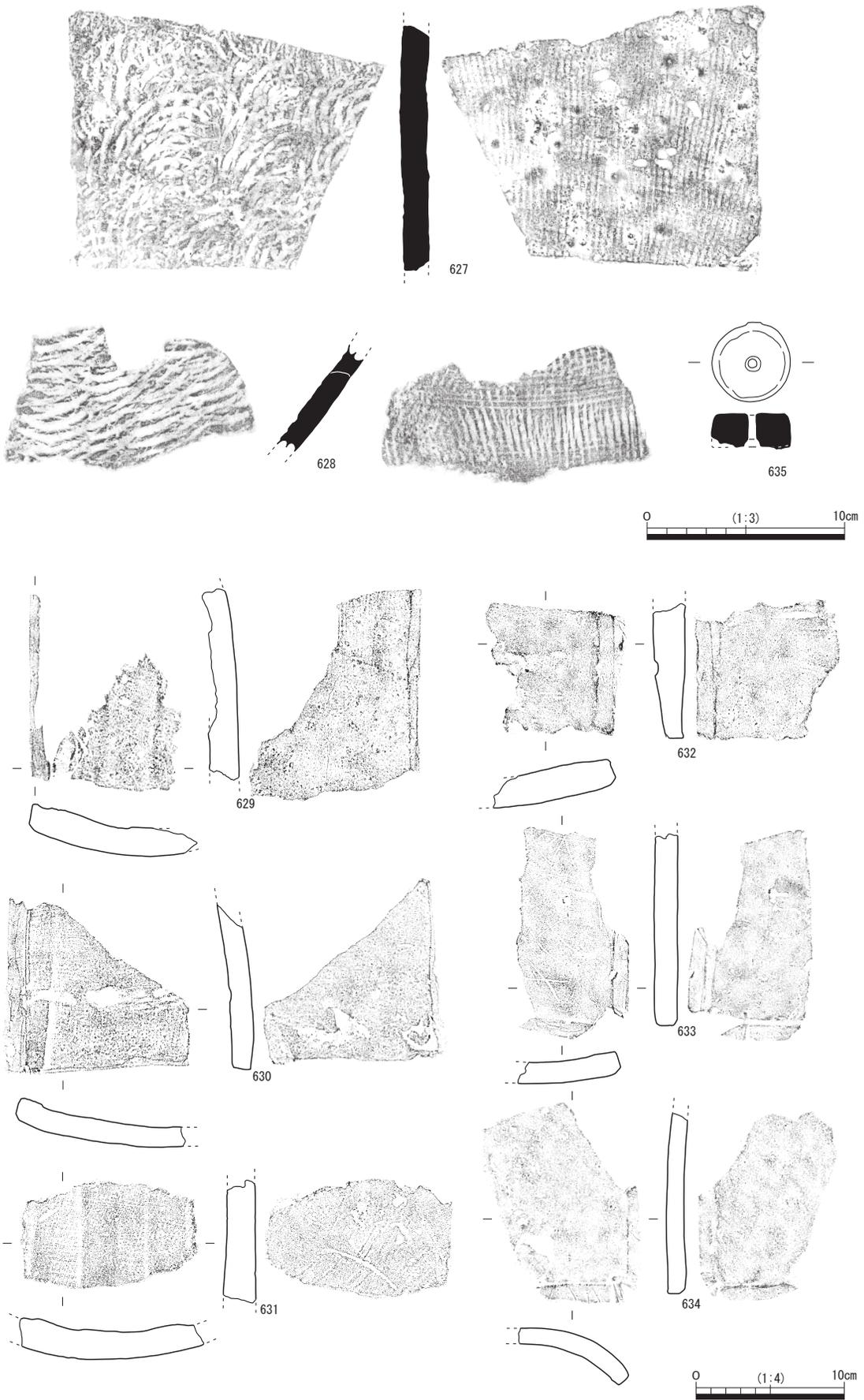
その他



第 75 図 2 号窯跡出土遺物実測図⑤ (1/3・1/4)

その他

大谷窯跡群



第 76 図 2 号窯跡出土遺物実測図② (1/3・1/4)

4. 3号窯跡

(1) 窯の構造 (第77図、図版21・29～31)

1・2号窯から北へ約25mの地点、同一丘陵の先端部に位置する。3号窯の灰原が4号窯の灰原に切られることから、3号窯から4号窯への先後関係を示す。

地下式の窖窯である。灰原から煙道部まで確認し、水平長約9mを検出した。全長6.5mで、焚口部側はわずかに絞り込まれるが、窯尻部ではほとんど絞り込みはなく、平面寸胴プランを呈する。燃焼部から煙道部にかけて天井部が遺存し、複数の排煙口からなる多孔式煙道である。窯の主軸方位はS-41°-Eである。焼成部や煙道部の横断面を見ると、窯体を拡幅している状況が確認でき、最低でも2度の操業面を想定できる。

【焚口部・燃焼部】 床面はほぼ水平で、最大幅は1.8mである。側壁には人頭大の石を用いた石組がある。左壁は長さ2.8m、右壁は長さ2.4mで、高さは両側壁ともに1.2mほどである。石の隙間にはスサ入り粘土や褐色・黄色土を用いて目詰めをしている。

遺物は杯G身、杯B蓋が出土した。

【焼成部】 水平長約5.5m、幅は焚口部側で1.8m、煙道部側で1.5m、天井までの高さは1.5m前後である。床面の傾斜角度は焚口部側から中央部までおおむね25度、中央部から窯尻部にかけては35度前後となる。燃焼部側の床面で、焼き台と考えられる須恵器甕片が出土した。

【煙道部】 3つの排煙口が上下2段に横一列に並ぶ多孔式煙道で、天井部が遺存する。奥壁までの水平長は約1.3mである。各排煙口の直径は上段が0.4m前後、下段が0.2m前後である。煙道部の横断面図では、上段と下段の境付近のレベルで、窯体を拡幅した痕跡が表現されている。したがって、6つの排煙口が並存するものではなく、それぞれの操業面に対応する3つの排煙口と捉えた方が良いであろう。

【溝】 煙道部の右側に、溝が接続する。窯の右側を焚口部方向に9mほど湾曲しながらのびる。上端の幅0.6m、下端の幅0.4mで、断面は逆台形を呈する。

【灰原】 詳細は不明であるが、全体図の中で長さ5m、幅3mの範囲で図示されている。

(2) 出土遺物

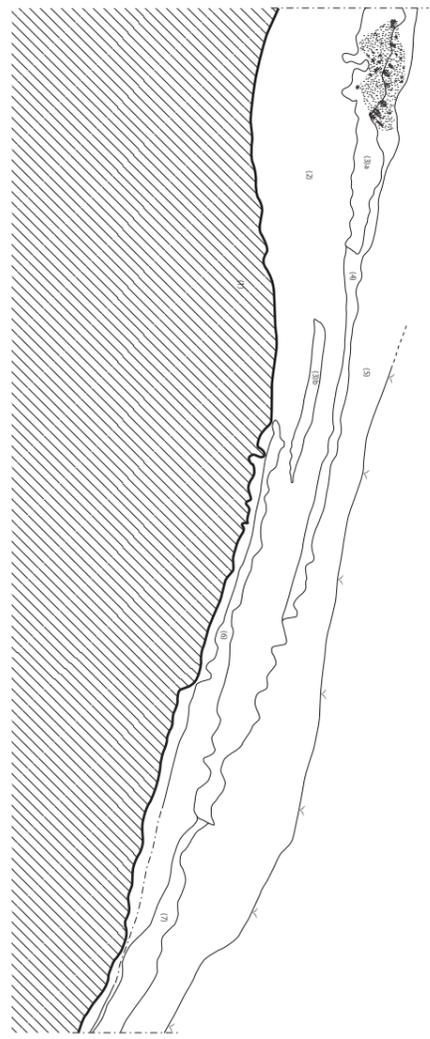
【焼成部 (第78図)】

須恵器 (636・637) 636は杯B蓋で、天井部は回転ヘラケズリである。637は杯G身である。底部はヘラ切り後ナデで、一部回転ヘラケズリを施す。

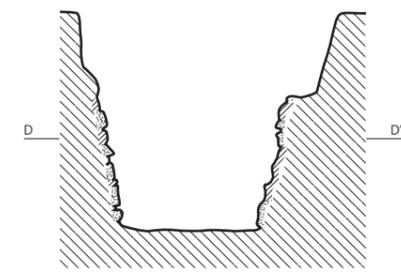
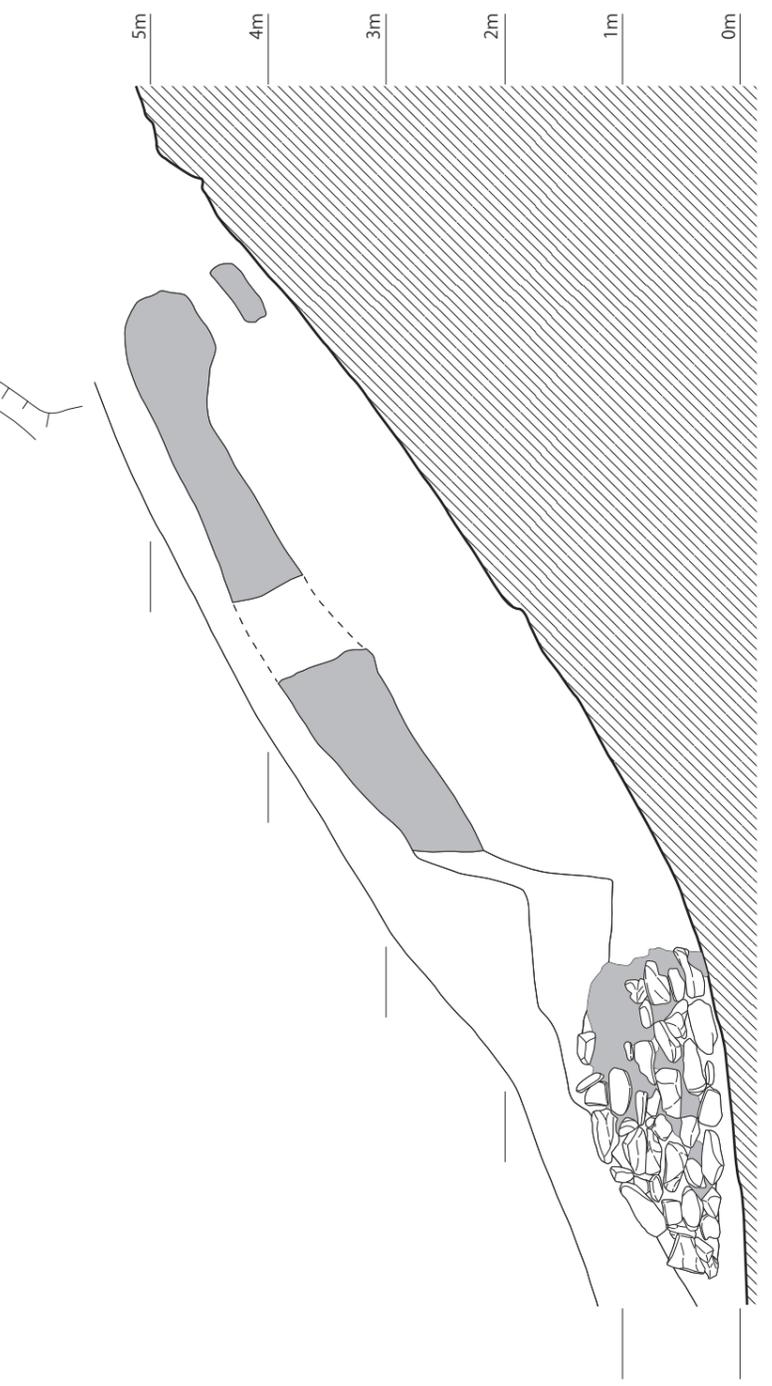
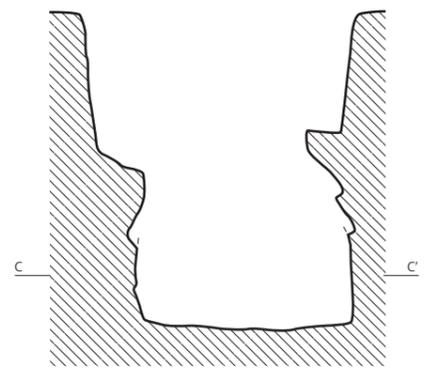
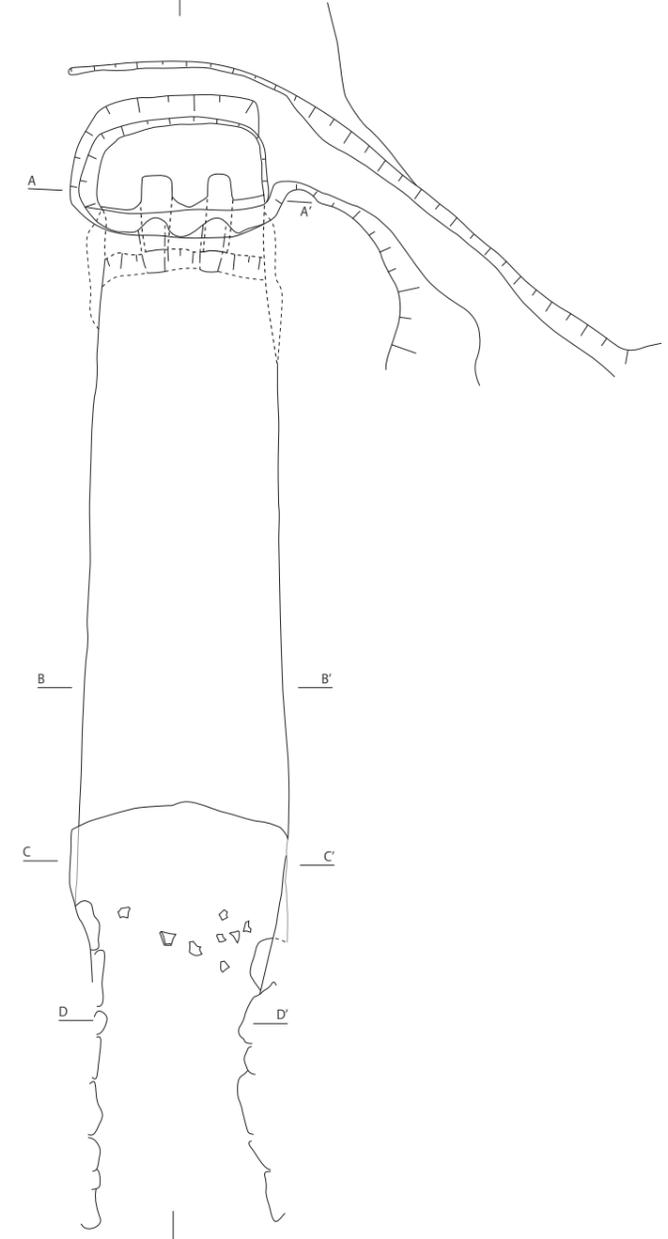
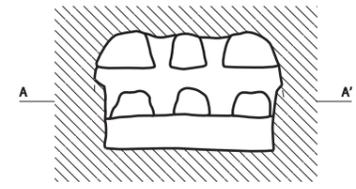
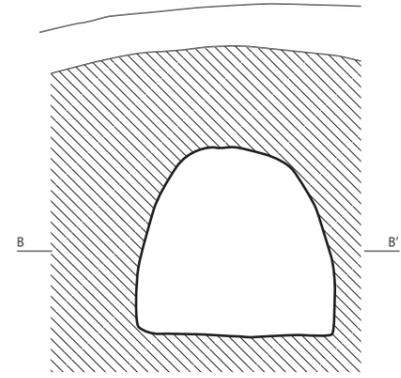
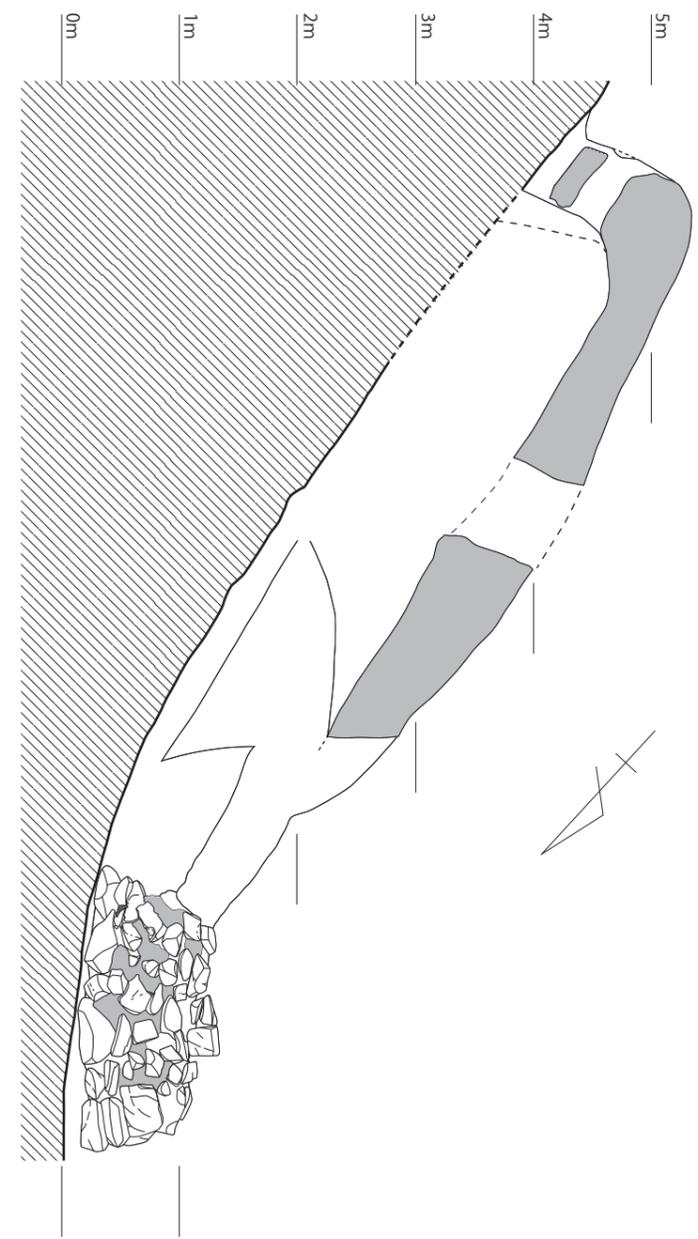
【灰原 (第78～80図)】

須恵器 (638～691) 638～641は杯H蓋で、640・641は外面にヘラ記号を有する。天井部は640が回転ヘラケズリ、他はヘラ切りである。642は杯H身の可能性もあるが、蓋として図示した。外面にヘラ記号を有し、天井部は回転ヘラケズリである。643は杯G蓋で、天井部はヘラ切りである。644～665は杯B蓋である。644～656は口縁部にカエリ、644～653はツマミを有する。646・650の天井部はヘラケズリ、他はヘラ切り後ナデ・回転ナデを施す。657～665は口縁部が直立する。天井部は657・658がヘラ切り、他は回転ヘラケズリである。666～668は杯H身である。666・668

- (1) 地山 (乳褐色)
- (2) 炭化物混黒炭色土層 (典型的遺物含層)
- (3)a 花崗岩粒及炭小塊混黄褐色土層 (砂質)
- b " " 上部灰埋入
- (4) 黒灰褐色土層
- (5) 暗灰褐色土層
- (6) 粘質乳灰褐色土層 (灰埋)
- (7) 乳灰色灰埋層 (灰埋)



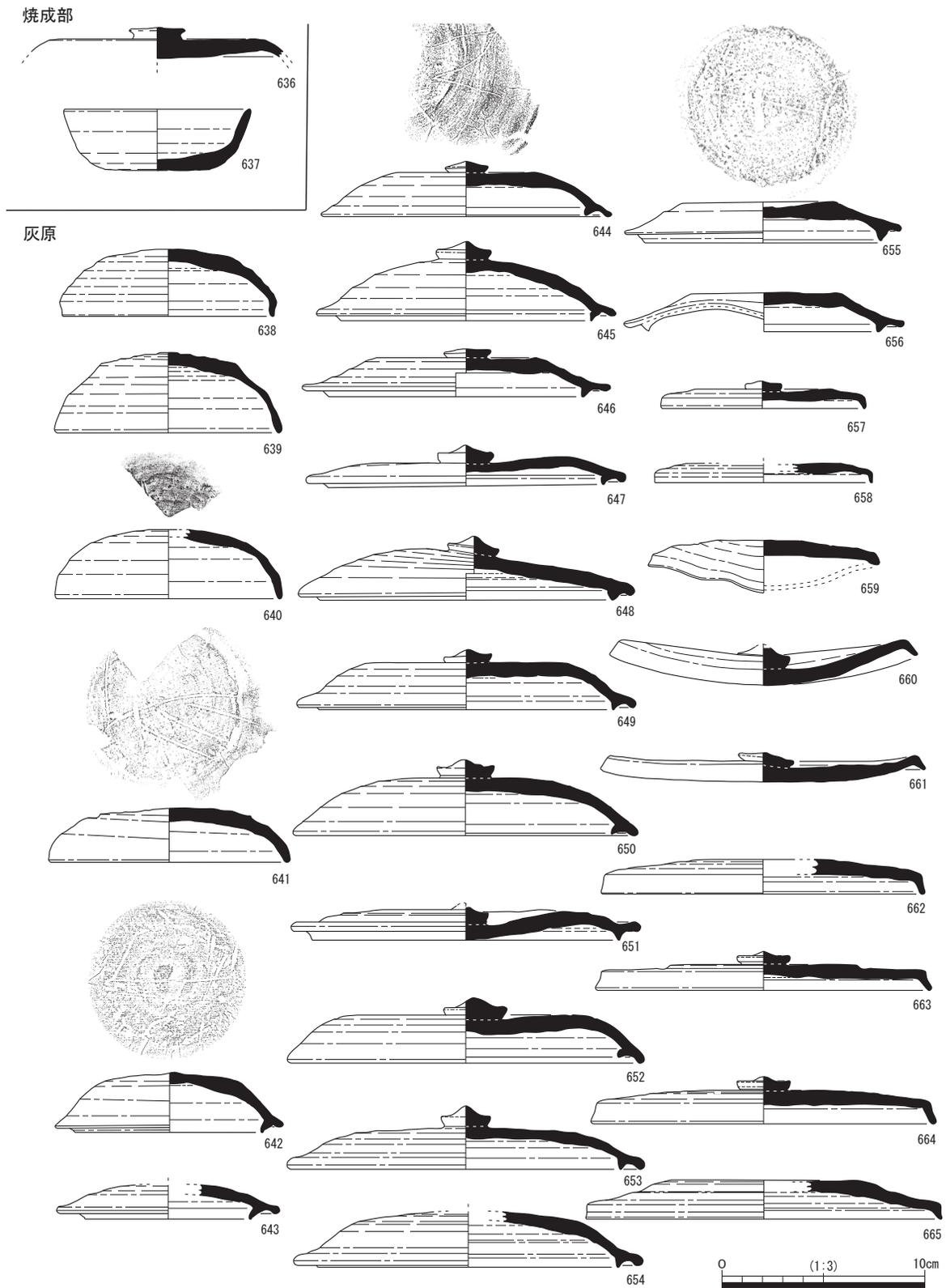
灰原織斯土層



高さの数値は絶対高ではなく比高差を示す。



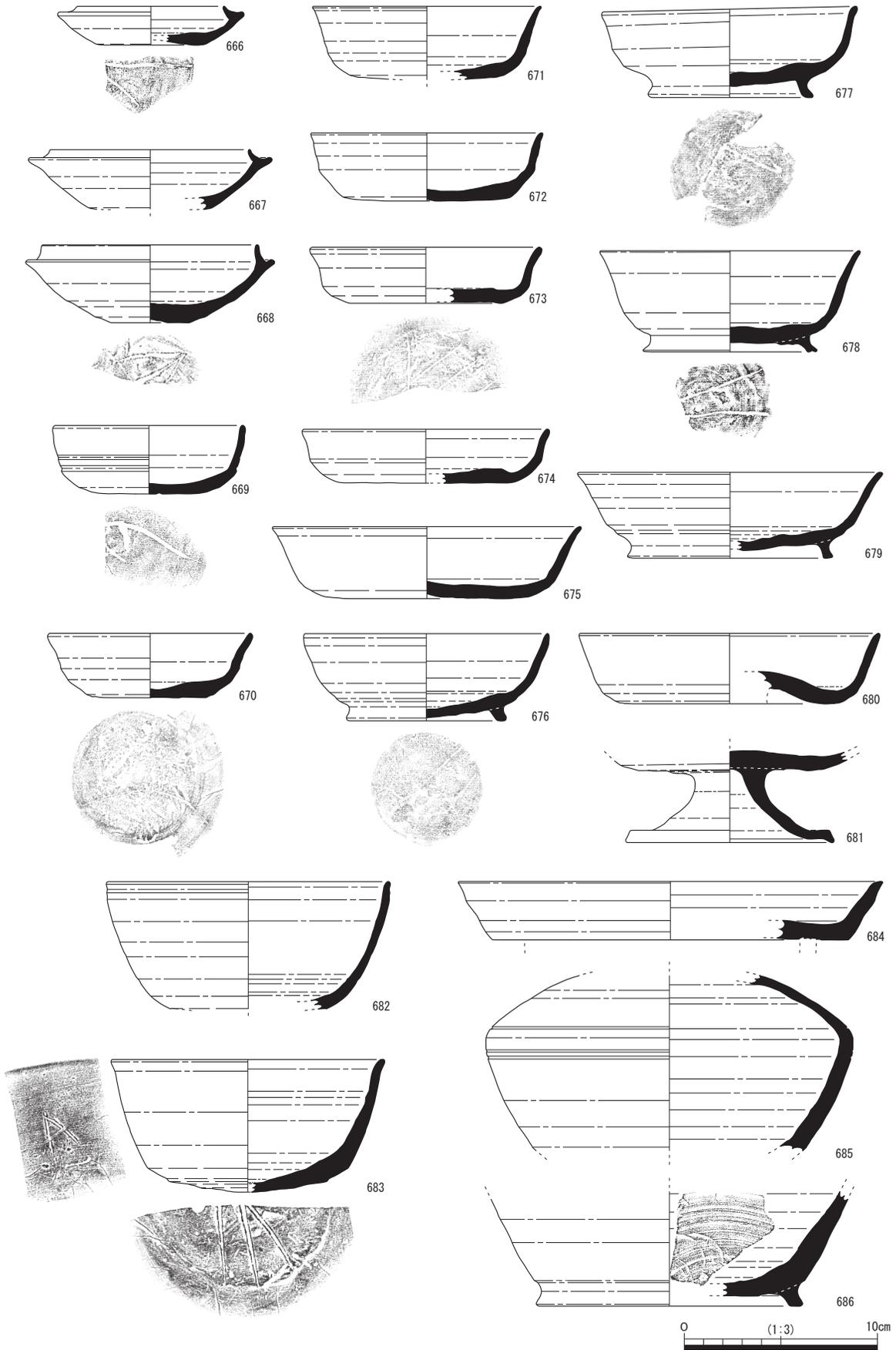
第 77 図 大谷窯跡群 3 号窯跡実測図 (1/60)



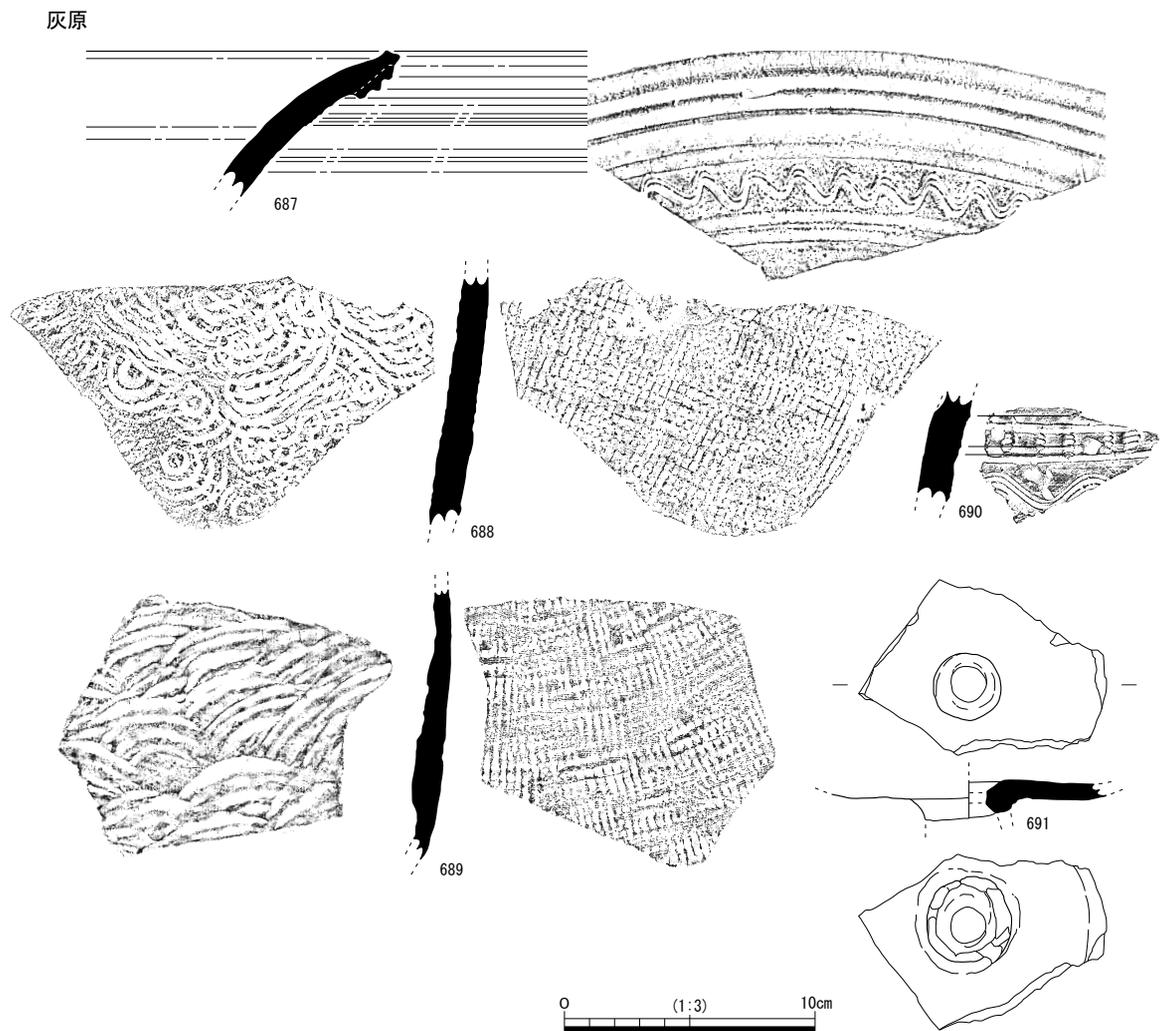
第 78 図 3 号窯跡出土遺物実測図① (1/3)

は外面にヘラ記号を有する。いずれも底部はヘラ切りで、668 は一部手持ちヘラケズリを施す。669 ～ 675 は杯 G 身で、669・670・673 は外面にヘラ記号を有する。底部は 673・675 が回転ヘラケズリ、他はヘラ切りである。676 ～ 679 は杯 B 身で、676 ～ 678 は底部外面にヘラ記号を有する。いずれも高台端部は外側に張り出し、底部はヘラ切りであるが、一部回転ヘラケズリを施す。680・681 は高杯で、内外面は回転ナデである。682・683 は椀である。底部はヘラ切りで、683 は底部側面に回

灰原



第 79 图 3 号窯跡出土遺物実測図② (1/3)



第80図 3号窯跡出土遺物実測図③ (1/3)

転ヘラケズリを施し、底部・体部の外面にヘラ記号を有する。684は高台付皿である。底部は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。685は長頸壺であろうか。体部は扁球形で、肩が張る。体部下半は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。686は長頸壺の底部片である。外面は回転ナデ後一部回転ヘラケズリ、内面には当具痕が残る。687は大甕の口頸部片で、外面に波状文を施す。688・689は甕の体部片で、外面に擬格子タタキ、内面には同心円・弧状の当具痕が残る。690は甕の小片で、外面に波状文および列点文を施す。691は高杯杯部の形態であるが、中央に焼成前穿孔を有するもので、器種は不明である。柱状の突起が下方へと伸びる。

(3) 小結

3号窯は、全長6.5mほどの地下式窖窯である。平面寸胴形で、複数の排煙口を有する多孔式煙道窯である。焼成部から煙道部にかけて天井部が残る。窯体内で出土した須恵器は杯G・杯Bで、灰原出土の遺物には、杯H(蓋の口径10～12cm)、杯G・杯Bがある。1・2号窯と比べて窯の規模が縮小していることや初期瓦を含まないことから、V～VI期にかけて操業したと考える。

5. 4号窯跡

(1) 窯の構造 (第81図、図版21・29・32)

3号窯の北側に接して構築する。3号窯の灰原を切ることから、3号窯から4号窯への先後関係を示す。地下式の窖窯である。煙道部を欠き、灰原から焼成部までを検出した。検出した残存長は約7mである。全長4.5mで、焚口部・窯尻部の絞り込みはなく、平面寸胴プランを呈する。窯の主軸方位はS-36°-Eである。

【焚口部・燃焼部】 床面はほぼ水平で、最大幅は1.2mである。

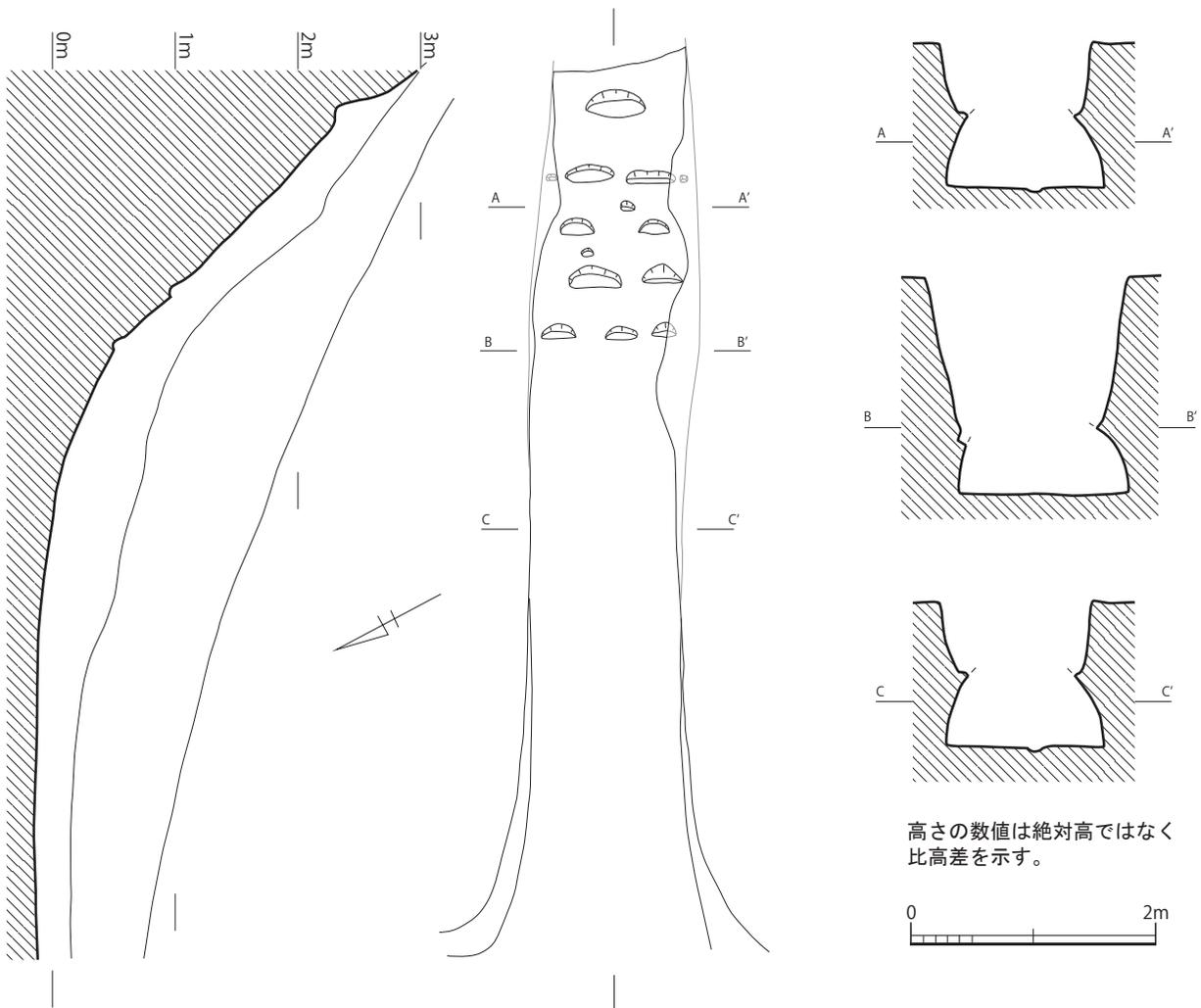
遺物は杯B蓋が出土した。

【焼成部】 水平長4.8m以上、幅は燃焼部側で1.2m、中央部で1.4m、煙道部側で1.1mである。床面の傾斜角度は焚口部側から中央部までおおむね10～25度、中央部から排煙部側にかけては45度前後となる。煙道部側の床面には直径0.1～0.5mほどの大小のピットがある。

【煙道部】 不明である。

【灰原】 詳細は不明であるが、全体図の中で長さ4m、幅2mの範囲で図示されている。

遺物は須恵器杯H・杯G・杯B、高杯、皿、甕などが出土した。

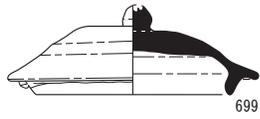


第81図 大谷窯跡群4号窯跡実測図 (1/60)

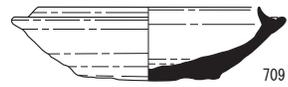
烧成部



692



699

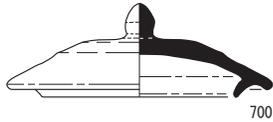


709

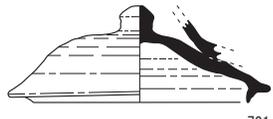
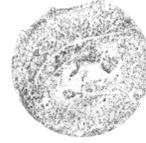
灰原



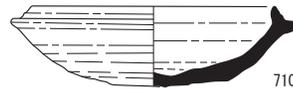
693



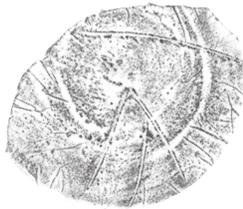
700



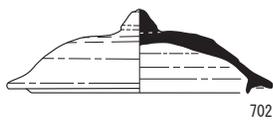
701



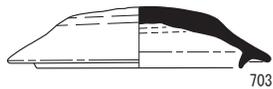
710



694



702



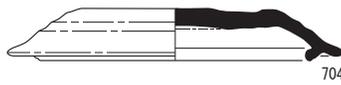
703



711



695



704



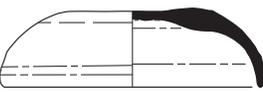
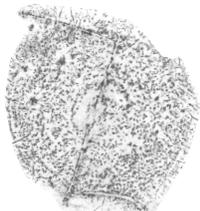
712



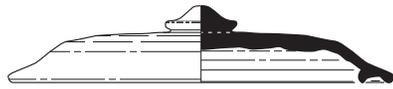
696



705



697



706



713



698



707

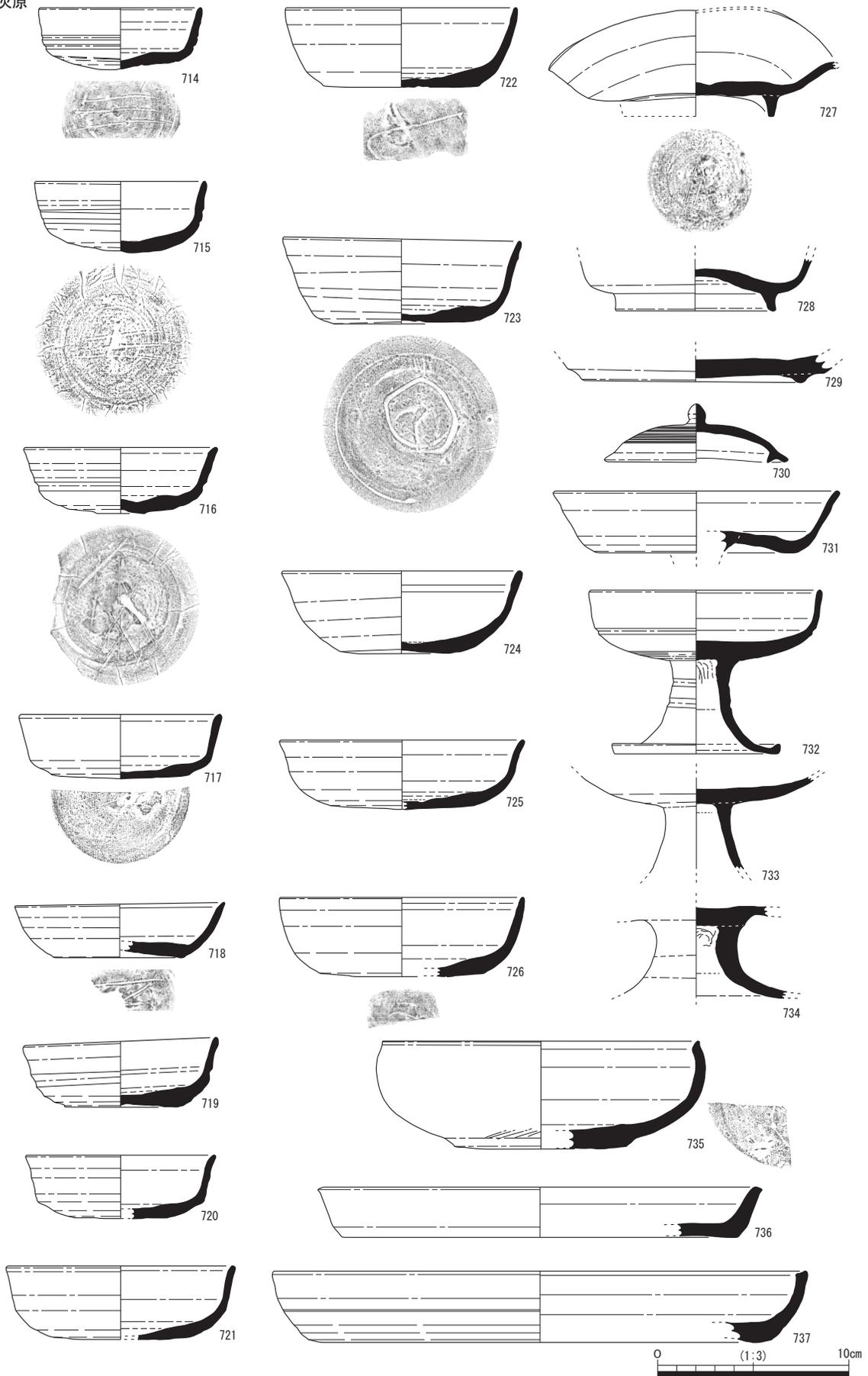


708

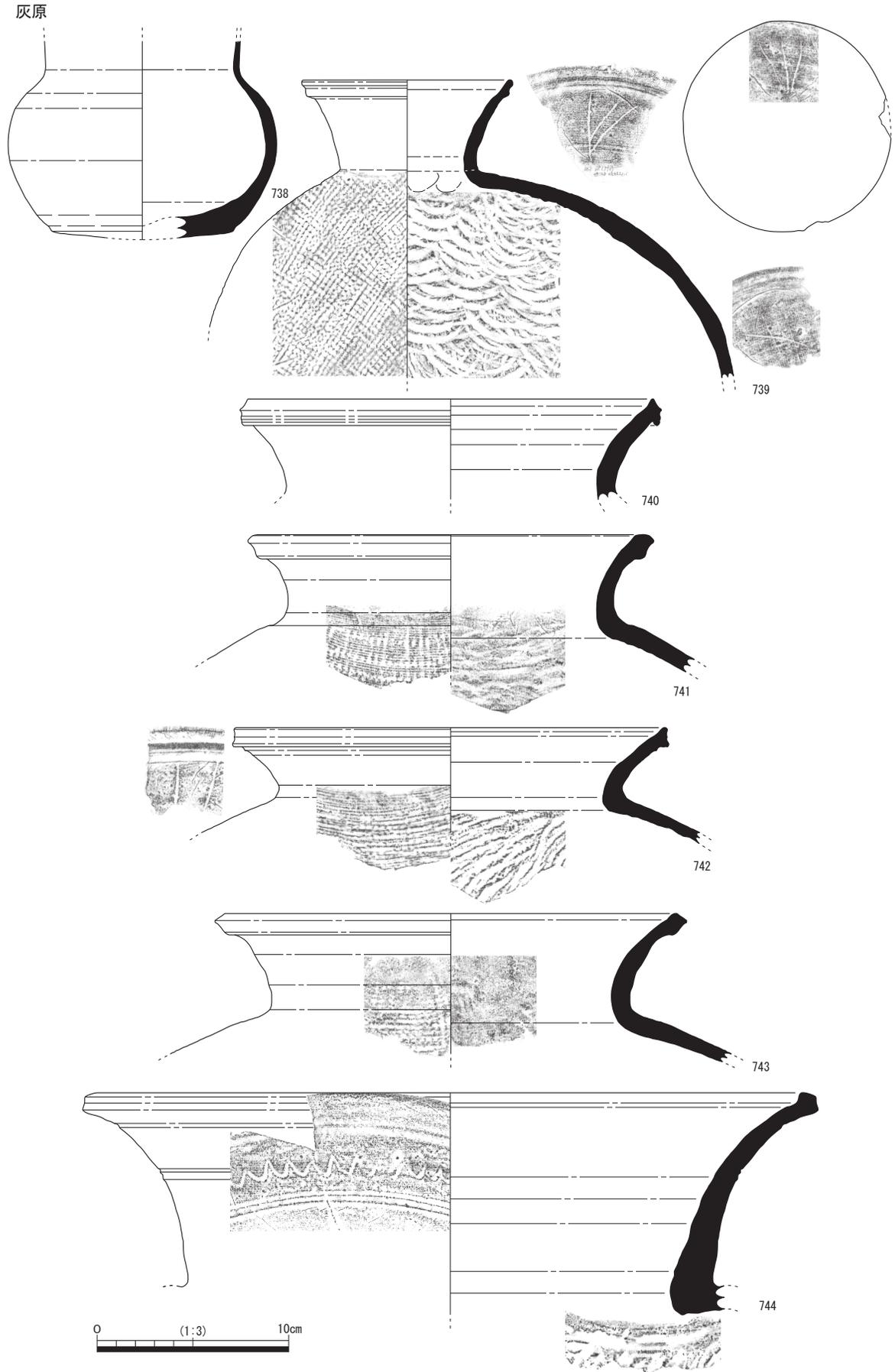


第 82 图 4 号窯跡出土遺物実測図① (1/3)

灰原



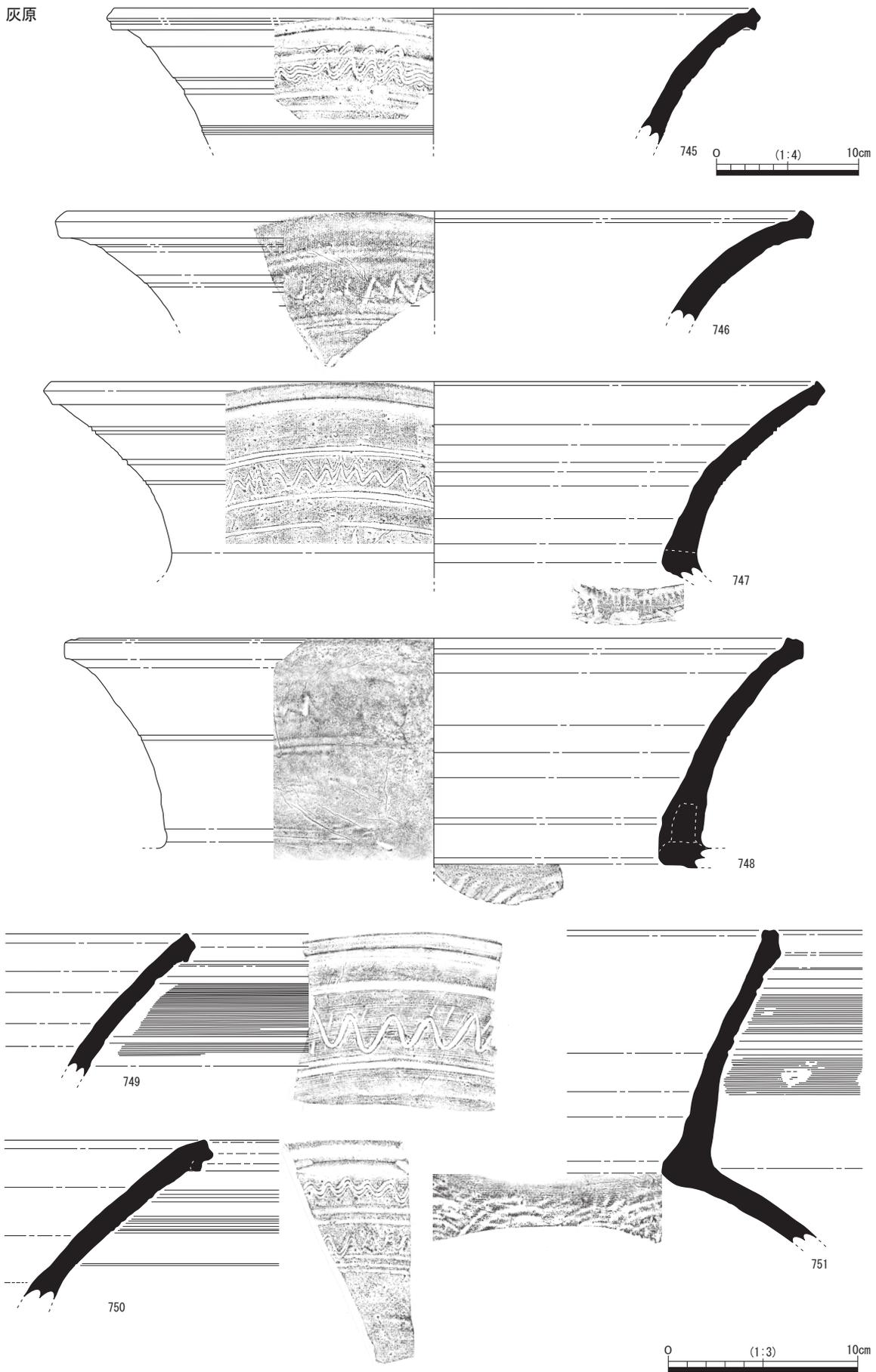
第 83 图 4 号窯跡出土遺物実測图② (1/3)



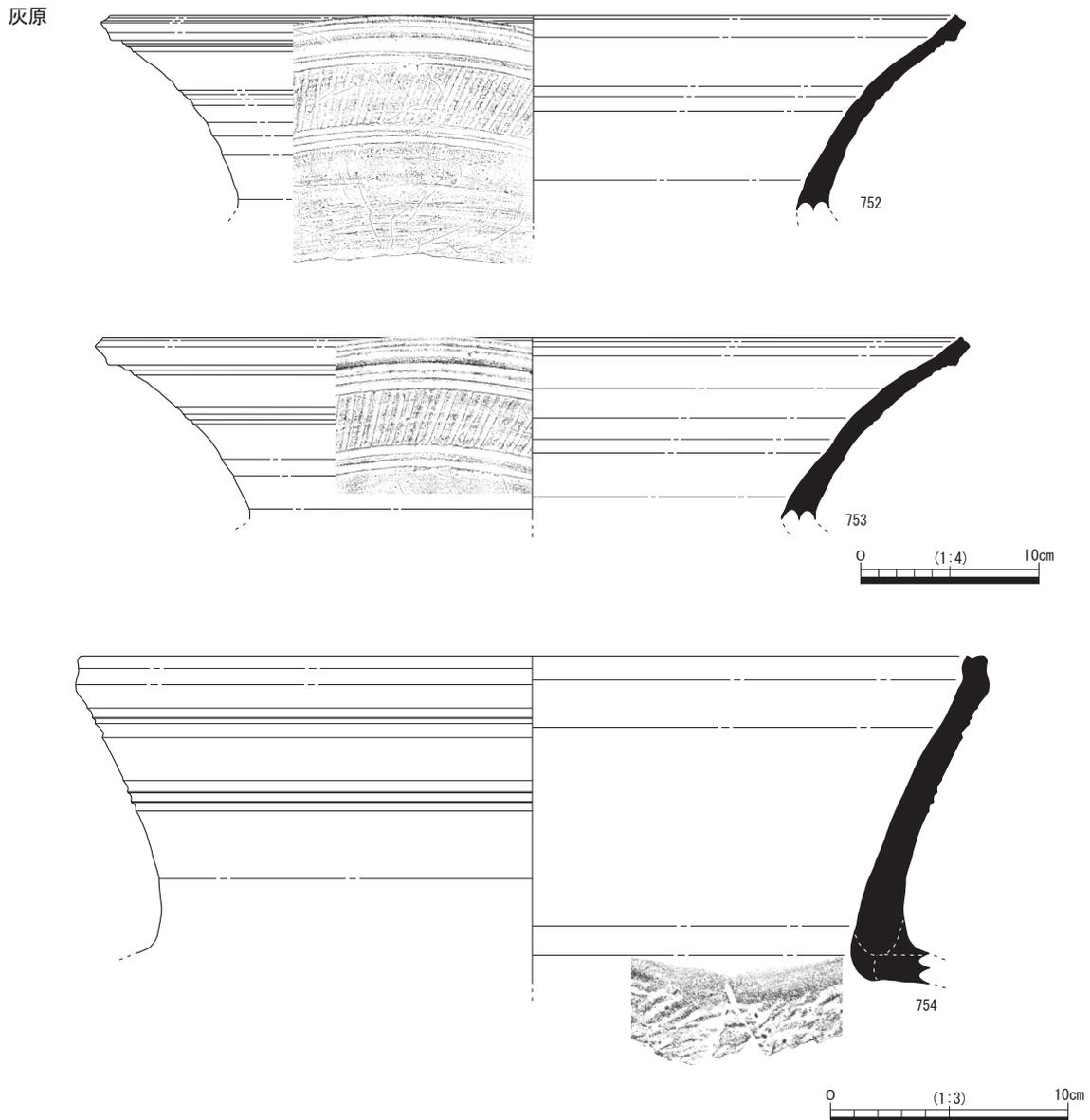
第 84 图 4 号窯跡出土遺物実測図③ (1/3)

灰原

大谷窯跡群



第 85 图 4 号窯跡出土遺物実測图④ (1/3 · 1/4)



第 86 図 4 号窯跡出土遺物実測図⑤ (1/3・1/4)

(2) 出土遺物**【焼成部 (第 82 図)】**

須恵器 (692) 杯 B 蓋で、口縁部にカエリを有し、天井部はヘラ切りで一部回転ヘラケズリを施す。

【灰原 (第 82 ~ 86 図)】

須恵器 (693 ~ 754) 693 ~ 698 は杯 H 蓋で、口径は 10 cm 程度である。695 を除き外面にヘラ記号を有する。天井部は 696 が回転ヘラケズリ、他はヘラ切りである。699 ~ 703 は杯 G 蓋である。699 ~ 702 はツマミを有する。天井部はいずれも回転ヘラケズリである。703 は外面にヘラ記号を有する。704 ~ 707 は杯 B 蓋で、口縁部にカエリを有し、705 ~ 707 はツマミを有する。天井部は 704 がヘラ切り、他は回転ヘラケズリである。705 は器体が大きく歪み、706 は外面にヘラ記号を有する。708 ~ 712 は杯 H 身で、口径は 711 が 11 cm、他は 8 ~ 9 cm である。すべて外面にヘラ記号を有する。底部は 712 が回転ヘラケズリ、他はヘラ切りである。713 ~ 726 は杯 G 身で、719・720・721・724・

725を除き外面にヘラ記号を有する。底部は714・715・723が回転ヘラケズリ、他はヘラ切りである。714～716は体部に沈線が巡る。727・728は杯B身で、いずれも高台は断面方形を呈し、端部の張り出しはない。727は底部外面にヘラ記号を有する。729は大型の器種で、高台付きの皿であろうか。高台の断面は低い逆台形を呈する。730は天井部にカキメを施すもので、高杯の蓋であろう。口縁部にカエリがあり、擬宝珠形のツマミを有する。731～734は高杯で、731・733は杯部下半に回転ヘラケズリ、732はカキメを施し、他は回転ナデである。735は鉢で、底部は平底を呈し、体部は内湾する。底部はヘラ切り後ナデで、外面にヘラ記号を有する。736・737は皿で、底部に手持ちヘラケズリを施す。738は平底の直口壺である。底部はヘラ切り後ナデ、他は回転ナデである。739は横瓶で、口頸部の3ヶ所にヘラ記号を有する。体部はタタキ成形で、外面に擬格子タタキ、内面には弧状の当具痕が残る。740～743は中型の甕である。口頸部はいずれも内外面を回転ナデ、741～743は体部外面に平行もしくは擬格子タタキ、内面には同心円当具痕が残る。742は口頸部にヘラ記号を有する。744～754は大甕である。いずれも口頸部は内外面とも回転ナデで、749・751は外面にカキメを施す。744～750は口頸部に波状文、752・753は斜線文を施し、751・754は無文である。

(3) 小結

4号窯は全長4.5mほどの地下式窖窯である。平面寸胴形で、煙道部の構造は不明である。窯体内で出土した須恵器は杯B、灰原からは杯H・杯G・杯B、高杯、甕・大甕などが出土した。灰原出土遺物の主体は杯G・杯Bであることや、1～3号と比較して窯の規模が著しく小型であることから、操業期間はVI期を中心とした時期を想定したい。

6. トレンチ、その他の出土遺物

【0 トレンチ (第 87 図)】

須恵器 (755) 隼の体部片で、底部にヘラ記号を有し、肩部に刺突文を施す。

【1 トレンチ (第 87 図)】

須恵器 (756 ~ 759) 756・757 は杯 H 蓋で、外面にヘラ記号を有する。天井部は 756 が回転ヘラケズリ、757 がヘラ切りである。758 は瓶類の口縁部であろう。内外面ともに回転ナデで、外面にヘラ記号を有する。759 は瓶類もしくは壺である。体部は球形で底部は平底である。肩部にカキメを施し、体部下半は回転ヘラケズリである。

【2 トレンチ (第 87 図)】

須恵器 (760 ~ 769) 760 ~ 764 は杯 H 蓋で、いずれも外面にヘラ記号を有する。天井部は 760 がヘラ切り、他は回転ヘラケズリである。765 ~ 767 は杯 H 身で、いずれも外面にヘラ記号を有する。底部は 765・766 が回転ヘラケズリ、767 がヘラ切りである。768 は高杯の杯部片で、沈線が巡る。769 は直口壺で、肩部に板状工具による回転ナデを施す。

【3 トレンチ (第 88 図)】

須恵器 (770 ~ 772) 770 は小型の壺である。底部はナデで、体部下半にヘラ状工具によるナデを施す。771 は瓶類もしくは壺である。体部に 3 条の沈線を施す。772 は扁平な器形の肩部片で、長頸壺であろうか。肩部に楯状工具により刺突文を施す。

【4 トレンチ (第 88 図)】

須恵器 (773 ~ 777) 773 ~ 775 は杯 H 蓋で、いずれも外面にヘラ記号を有する。775 は内面にヘラ記号状の条線がある。天井部はいずれもヘラ切りである。776 は杯 H 身で、外面にヘラ記号を有する。底部はヘラ切り後一部ヘラケズリを施す。777 は直口壺で、内外面は回転ナデである。

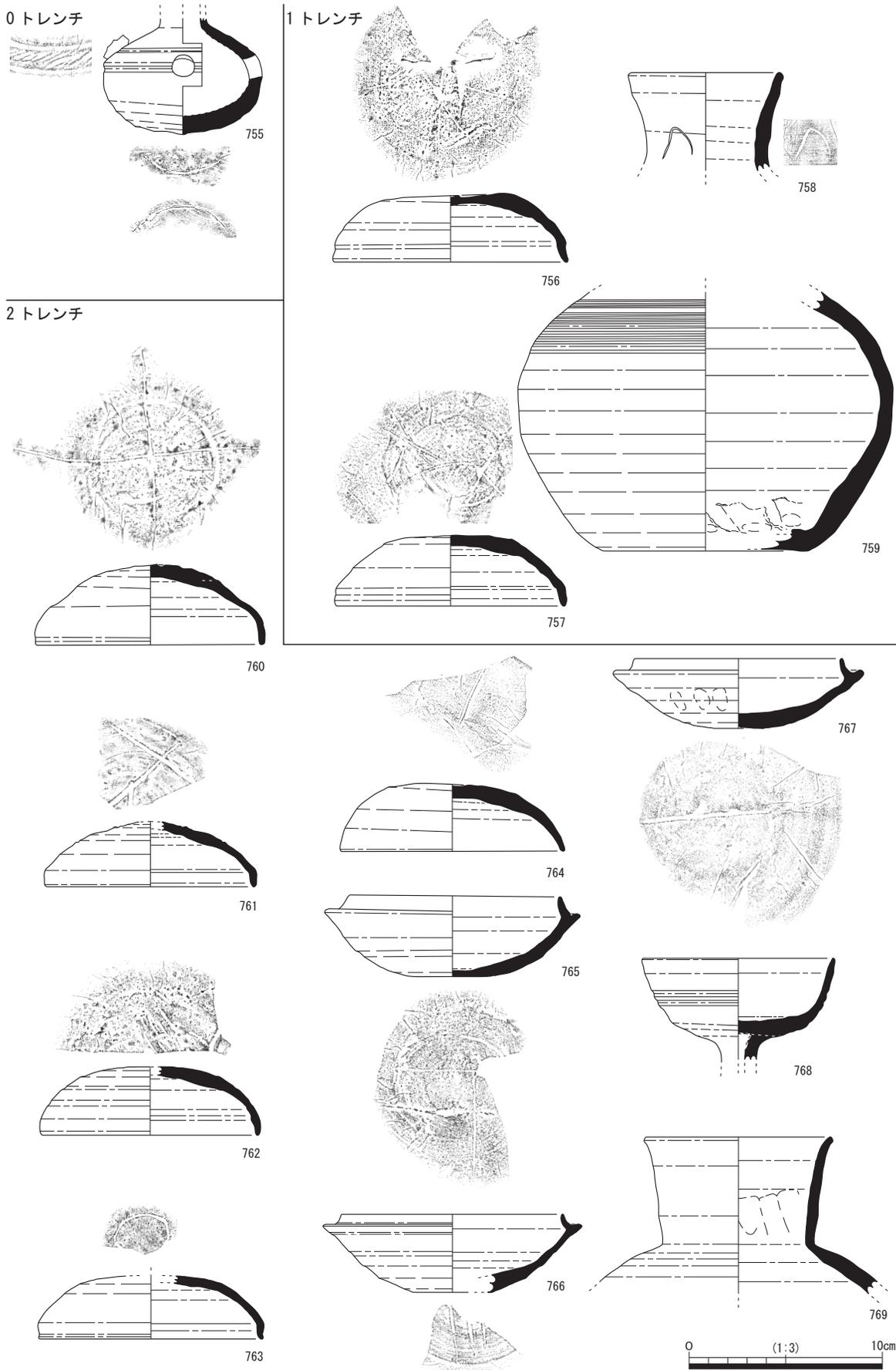
【5 トレンチ (第 89 図)】

須恵器 (778 ~ 796) 778 ~ 781 は杯 H 蓋で、天井部はいずれも回転ヘラケズリである。778・779 は外面にヘラ記号を有し、780・781 は外面に竹管文を施す。782 は杯 G 蓋で、天井部は回転ヘラケズリである。783 ~ 790 は杯 H 身で、底部は全て回転ヘラケズリである。786 ~ 788 は外面にヘラ記号を有し、789・790 は外面に竹管文を施す。785 は底部に焼成前穿孔がある。791・792 は椀で、外面にヘラ記号を有する。底部はいずれも回転ヘラケズリである。793 は高杯蓋で、ボタン状のツマミを有し、天井部は回転ヘラケズリである。794・795 は隼である。794 は口頸部片で、内外面は回転ナデ、シボリ痕が明瞭に残る。795 は体部片で、最大径の位置に刺突文を施し、底部にヘラ記号を有する。796 は平瓶で、肩部がやや張る。底部は接合部で剥離する。

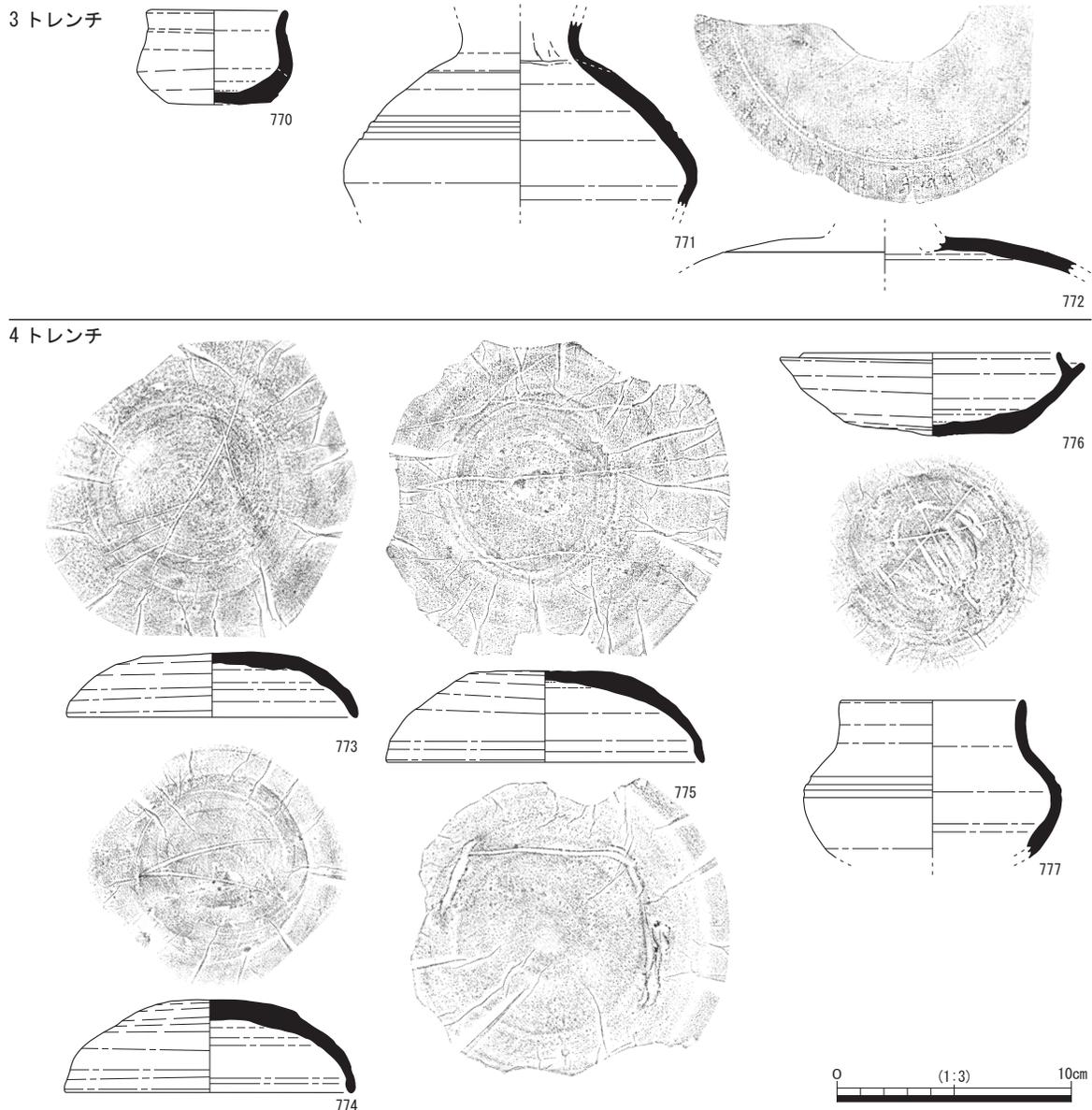
【1・2号灰原 (第 90 図)】

須恵器 (797 ~ 801) 797 は杯 H 蓋で、外面にヘラ記号を有し、天井部は回転ヘラケズリである。798 は杯 H 身で、外面にヘラ記号を有し、底部は回転ヘラケズリである。799 は杯で、底部はヘラ切り後ナデである。800・801 は椀で、800 は体部上半にカキメを施し、801 は体部下半に突帯が巡る。

瓦 (802) 平瓦である。凹面に模骨痕・布目痕が残り、凸面はナデである。



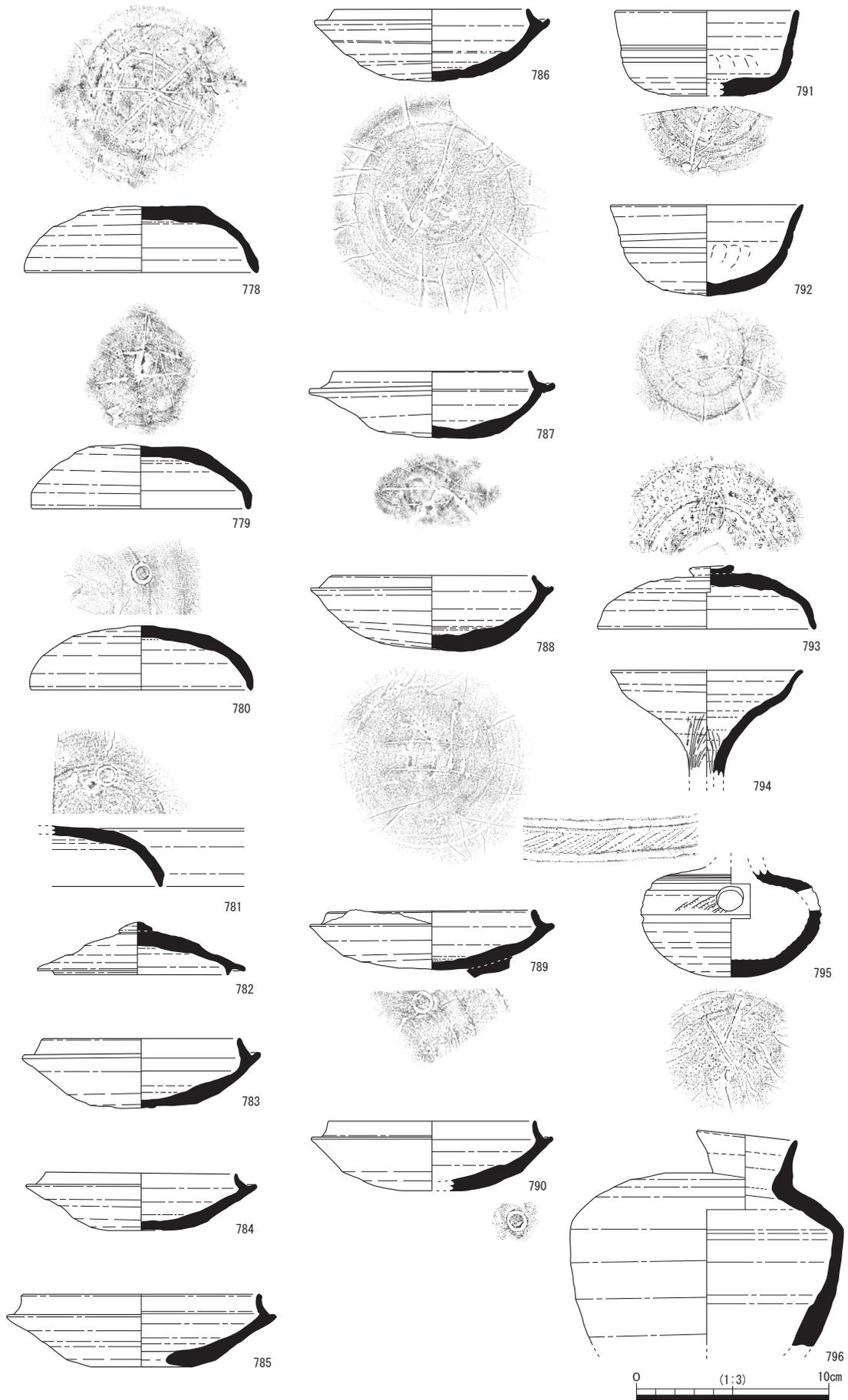
第 87 図 0・1・2 トレンチ出土遺物実測図 (1/3)



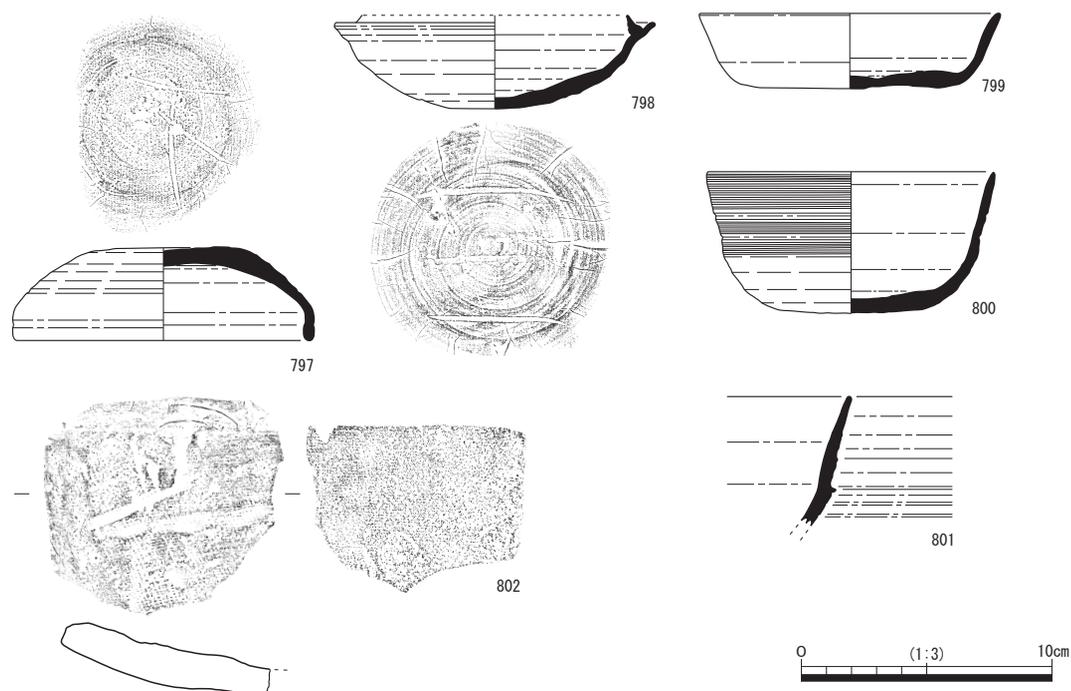
第88図 3・4 トレンチ出土遺物実測図 (1/3)

【3区灰原(第91～94図)】

須恵器(803～855) 803～807は杯H蓋で、805～807は外面にヘラ記号を有する。807は天井部を手持ちヘラケズリ、他は回転ヘラケズリを施す。808～813は杯G蓋で、812・813は外面にヘラ記号を有する。天井部は809がカキメ、811～813がヘラ切り、他は回転ヘラケズリである。814～828は杯B蓋で、814～825は口縁部にカエリを有し、826・827は口縁部が直立する。820・822・825は外面にヘラ記号を有する。天井部は821・822がヘラ切り、他は回転ヘラケズリである。829は杯H身で、外面にヘラ記号を有する。底部は回転ヘラケズリである。830～838は杯G身で、831～837は外面にヘラ記号を有する。いずれも底部はヘラ切りで、830・832・833は底部側面に回転ヘラケズリを施す。838の底部はヘラ切りである。839～842は杯B身で、842を除き底部外面にヘラ記号を有する。840～842の高台は端部がわずかに外方に張り出す。843は杯Bと比べ、口径が小さい高台付の杯である。844は底部を欠くが、杯B身であろう。845・846は皿もしくは盤で、



第 89 図 5 トレンチ出土遺物実測図 (1/3)

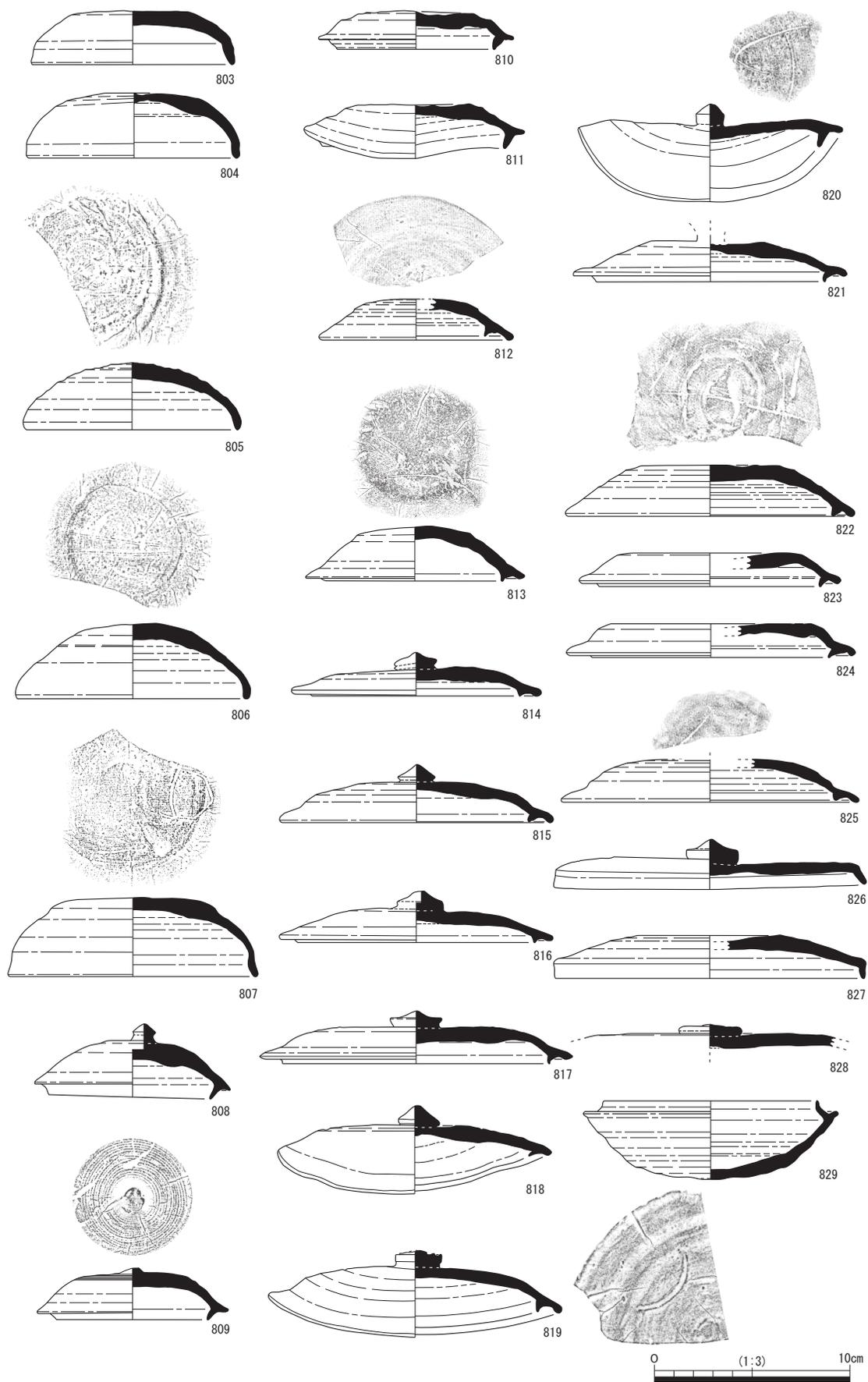


第90図 3区1・2号灰原出土遺物実測図 (1/3)

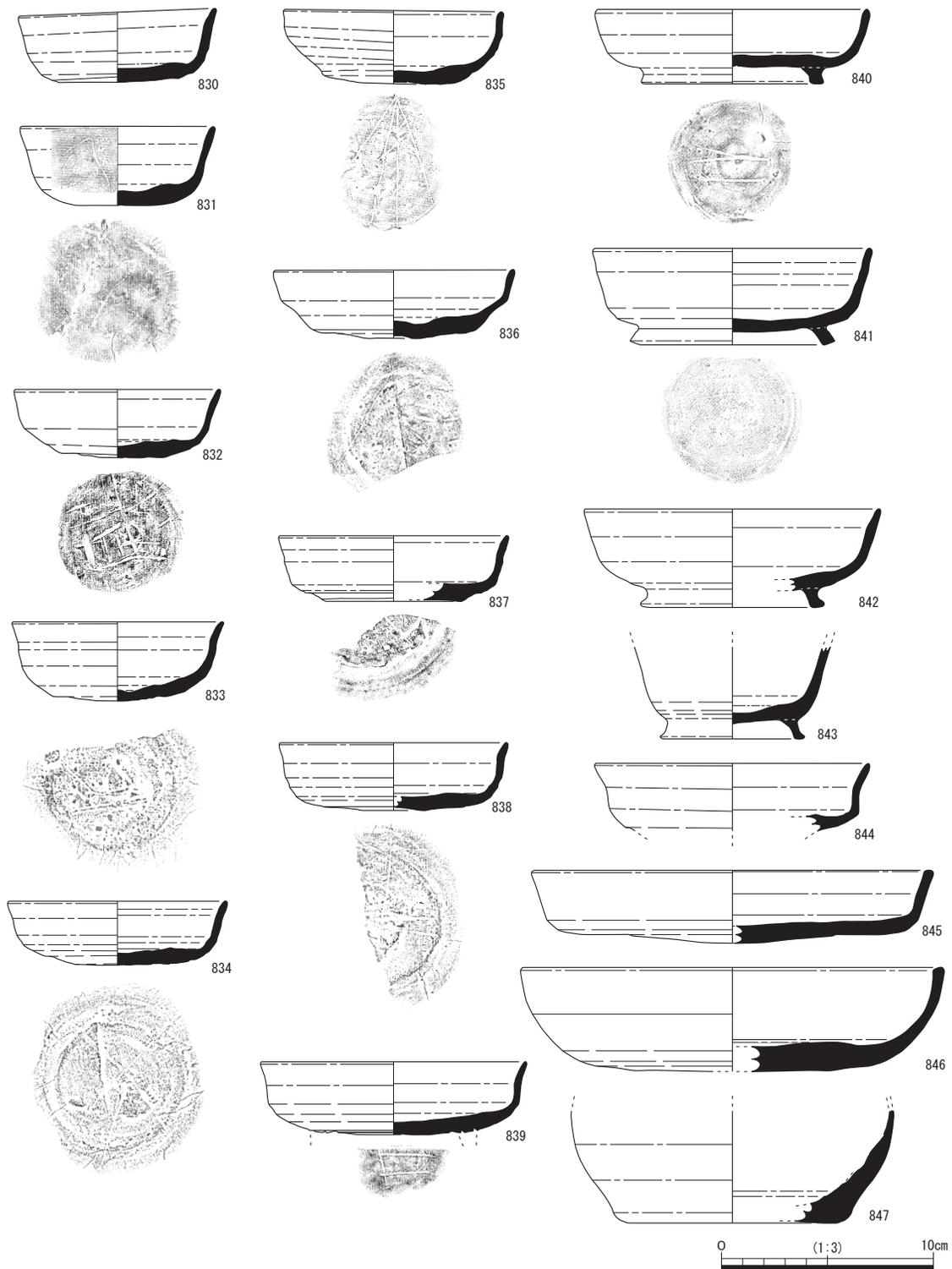
845は口縁部が直立する。846は内湾して立ち上がる。845の底部はヘラ切り後側面に回転ヘラケズリを行う。846の底部は回転ヘラケズリである。847は鉢状の器形を呈する壺で、底部は平底である。底部はヘラ切り、底部側面は回転ヘラケズリを施す。848はすり鉢（陶臼）で、底部外面に無数の刺突痕がある。849は瓶類の口縁部であろう。850は小型の甕で、内外面は回転ナデである。851は中型の甕で、外面にカキメ後波状文を施す。852は大甕で、外面に二段の波状文を施す。

853～855は獣脚硯である。853は脚部の1本と縁台（海底）の1/6程度が遺存する。縁台端部の復元径は17.0cmである。焼成はやや軟質で橙褐色を帯びる。胎土は精良で、1mm以下および1～2mmの白色砂粒を含む。縁台上面の外縁部側は外堤部の剥離痕があり、外堤部の厚さは0.3cmほどと想定できる。陸側は1.0cmの幅で回転ナデを施し、幅0.4mmの剥離痕がある。回転ナデが擬口縁かは明瞭ではないが、陸側が接続すると考えられる。海底部分は2.3～2.6cmの幅で回転ナデを施しているが、全体に粗い調整である。縁台上面の高さは3.4～3.5cmである。縁台下面はケズリ、陸側はナデである。縁台端部も水平方向にケズリを施す。脚部は断面の形状が円形で、下半部に向けて幅を広げ、設置面は平坦である。縁台外縁部に接合し、脚上端部は欠損するが、縁台より上に突出する。脚前面にはスタンプにより5条の条線および横方向の沈線を施文するが、左端の条線と横方向の沈線はつぶれて不明である。条線の先端は欠損のため形状不明であるが、下方に向かって広がる。文様の上端は角が明確ではなく、やや歪んでいる。スタンプの両側にはヘラ状工具により縦の沈線を施す。脚部設置面の調整は、不明であるがナデであろう。

854は脚部の1本、縁台（海底）の1/5程度が遺存する。縁台端部の復元径は17.6cmである。焼成はやや軟質で橙褐色を帯びる。胎土は精良で、1mm以下および1～2mmの白色砂粒を含む。縁台上面の外縁部側は外堤部の剥離痕と考えられ、外堤部の厚さは0.5cmほどと想定できる。陸側は

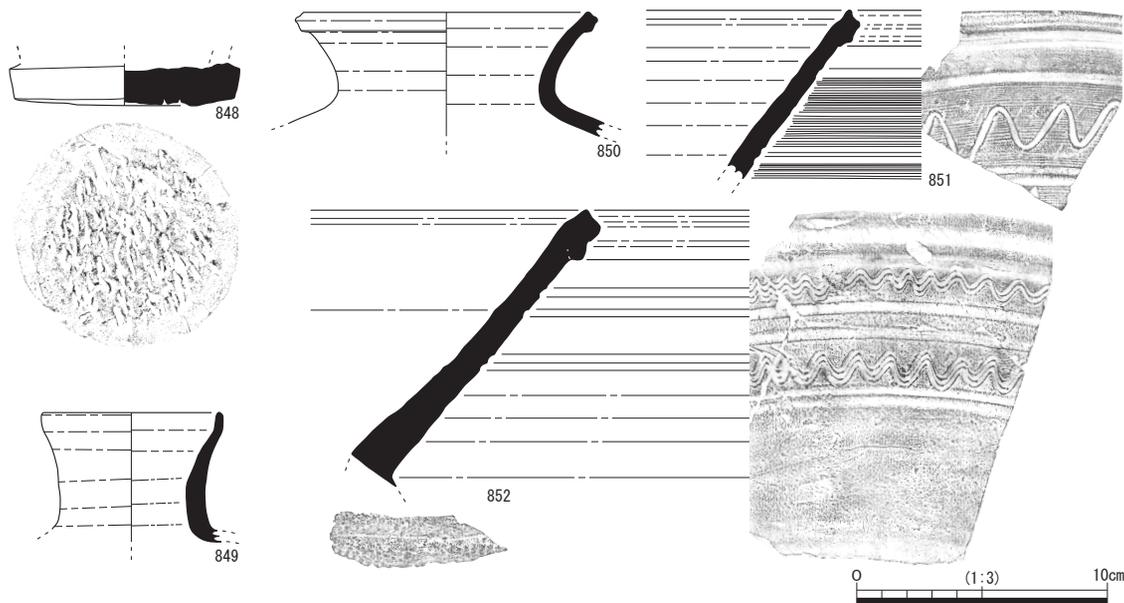


第 91 图 3 区灰原出土遺物実測図① (1/3)



第92図 3区灰原出土遺物実測図② (1/3)

0.3～0.5cmの幅で回転ナデを施し、擬口縁状を呈することから、陸部の剥離痕跡と考えられる。海底部分は指オサエ後2.2～2.5cmの幅で回転ナデを施しているが、全体に粗い調整で指頭痕が明瞭に残る。海底上面の高さは4.0cmである。縁台下面はケズリ、陸側はナデである。縁台端部も水平方向にケズリを施す。脚部は断面の形状が楕円形で、下半部が幅広になりながら上方に反り上がる。設置面は丸みを帯び平坦面はない。縁台外縁部に接合し、脚上端部は欠損するが、縁台より上



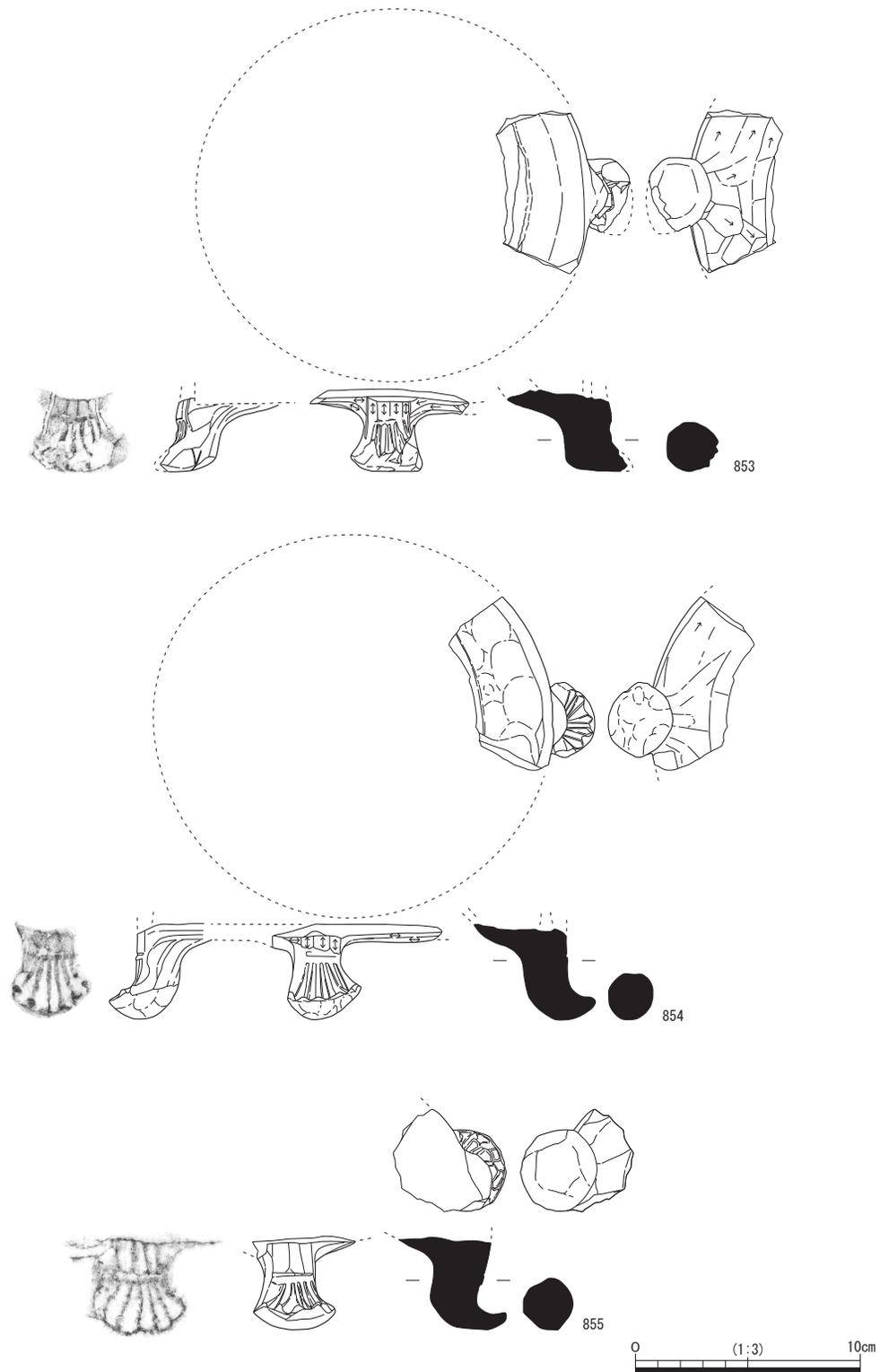
第93図 3区灰原出土遺物実測図③ (1/3)

に突出する。脚前面にはスタンプにより5条の条線および横方向の沈線（2条の突線）を施文する。条線の先端は剣菱形を呈し、文様の上端は明瞭な角を有している。文様の部分が窪むことから、文様を陽刻した原体を使用したことが分かる。脚部上位・文様の両側面と背面部は垂直方向にケズリを施す。砂粒の動きは小さく、非常にシャープであることから、ある程度乾燥が進んだ段階の調整と考えられる。脚部設置面は指オサエで、指頭痕が明瞭に残る。

855は脚部の1本と縁台の一部が遺存するが、細片のため直径は不明である。焼成は硬質で灰色を呈する。胎土は精良で、1mm以下および1～2mmの白色砂粒を含む。縁台上面は全体が剥離するため、外堤・陸・海との関係性や調整は不明である。縁台下面はケズリで、縁台端部も水平方向のケズリである。脚部は断面の形状が円形で、下半部が幅広になりながら端部は上方に反り上がる。設置面は丸みを帯び、直径1.5cmの範囲で平坦面がある。縁台外縁部に接合し、脚上端部は欠損するが、縁台より上に突出する。脚前面はスタンプにより施文し、文様のモチーフ・形状や寸法が854と酷似しており、同一原体を使用したと考えられる。ただし、855は脚部先端側を一度スタンプしたのち、もう一度本体側に押圧することから、一部文様に乱れが生じる。脚部上位・文様の両側面と背面部は垂直方向にケズリを施す。854と比べ、砂粒や粘土の動きが顕著で、粘土の乾燥が進行していない段階の調整と考えられる。脚部設置面は工具によるナデで、一部穀類の圧痕が残る。854と855は色調が大きく異なるが、その他の要素はよく似る。855は縁台上面の剥離面が焼け弾けたようにも見えることから二次焼成を受けた可能性もあり、この場合854と855は同一個体の可能性がある。

【3区道路断面（第95図）】

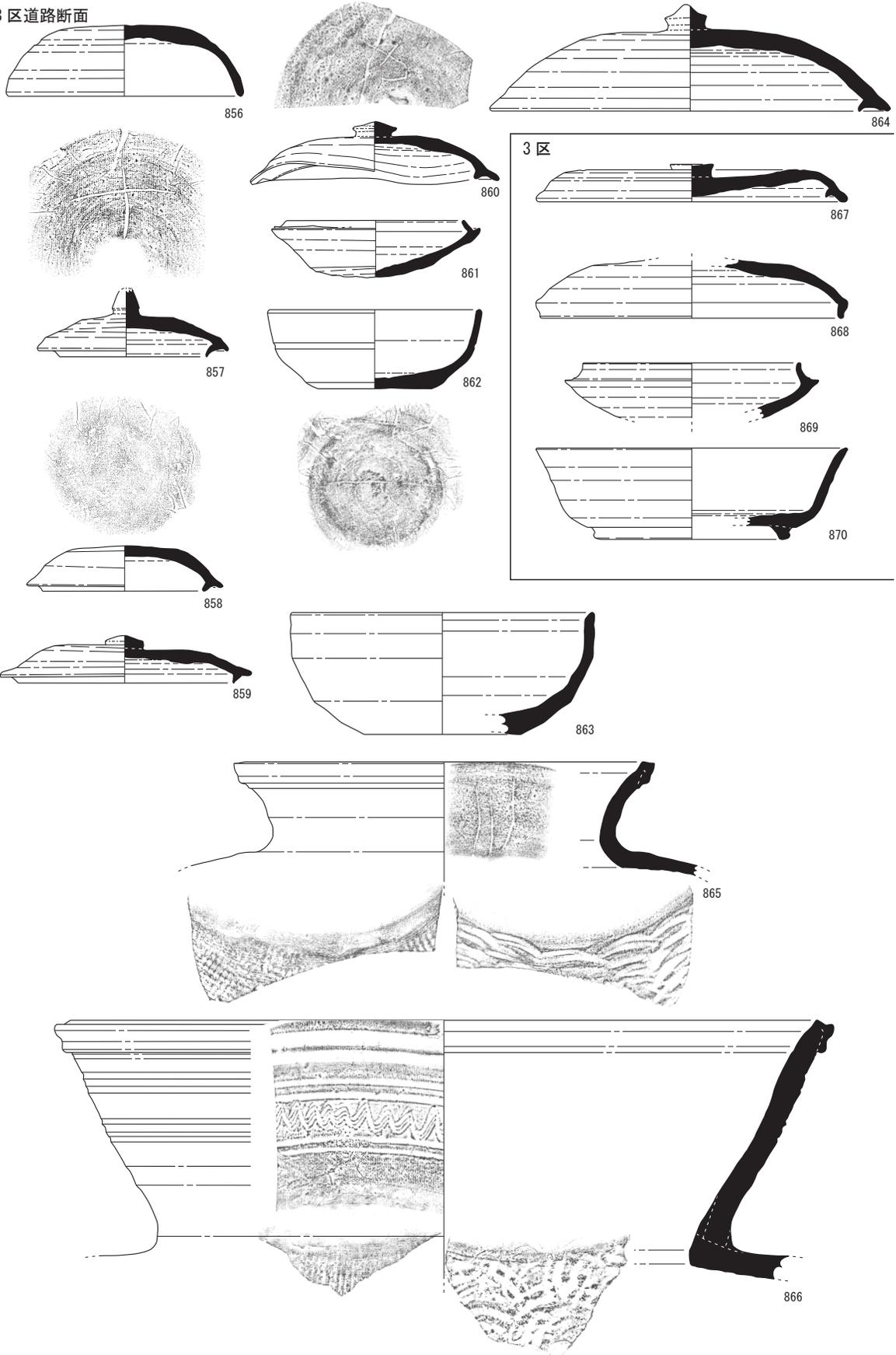
須恵器（856～866） 856は杯H蓋で、天井部は回転ヘラケズリである。857・858は杯G蓋で、いずれも外面にヘラ記号を有する。天井部は857が回転ヘラケズリ、858は摩滅のため不明である。859・860は杯B蓋で、860は外面にヘラ記号を有する。天井部は859がヘラ切り、860が回転ヘラ



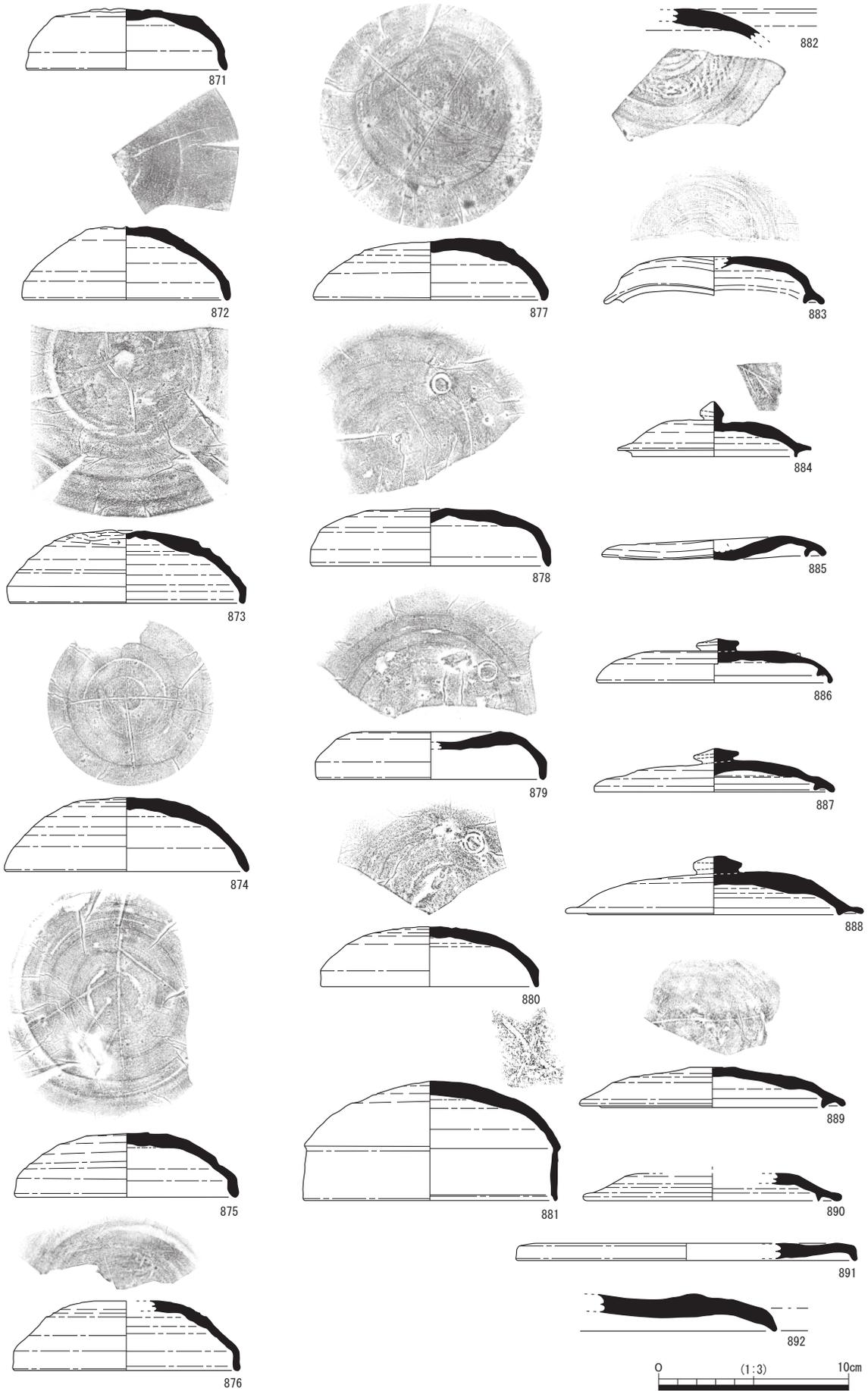
第94図 3区灰原出土遺物実測図④ (1/3)

ケズリである。861は杯H身で、底部はへら切りである。862は杯身で、外面にへら記号を有し、カキメを施す。863は鉢で、内外面は回転ナデ、底部の調整は摩滅のため不明である。864は大型の蓋で、壺に伴うものであろうか。口縁部にカエリを有する。天井部はへら切りである。865は中型の甕である。体部は外面に擬格子タタキ、内面には同心円当具痕が残る。口頸部にへら記号を有する。866は大甕で、体部は外面に平行タタキ、内面には同心円当具痕が残る。頸部に波状文を施す。

3区道路断面



第95图 3区道路断面灰原・3区出土遺物実測图 (1/3)



第 96 图 大谷窯跡群出土地点不明遺物実測图① (1/3)